九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

海外英語研修の意義 : ケンブリッジ大学で学ぶ九大生

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5370

出版情報：言語文化論究. 13, pp.163-175, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

海外英語研修の意義

― ケンブリッジ大学で学ぶ九大生 ―

鈴　木　右　文

1．導　　入

九州大学の学生が，1996年より毎年ケンブリッジ大学での英語研修に参加している。筆者は1999年度と2000年度の２回にわたって世話役の一人を務めた。本論は，そうした経験の中から，海外における英語研修の意義を説き，その実施方法の考察を目的とするものである。なお，本論で述べられている事項は，筆者の参加した年度の実施内容によるもので，初期の研修においては必ずしもあてはまらないものであることをお断りしておく。

2．歴　　史

この英語研修旅行は，九州大学言語文化部（当時）の廣田稔教授が，1991-1992年に10ヶ月間留学した英国ケンブリッジ大学ペンブロークカレッジ（Pembroke College）に，英語研修を目的として海外から学生がやってきているのを知り，九州大学の学生にも門戸が開かれるよう努力した結果，1996年から実施の運びとなったものである。1996年の第１回は15名，1997年の第２回は36名，1998年の第３回は52名と次第に参加者も増え，1999年の第４回は53名，2000年の第５回は52名となっている。2001年の第６回も53名の参加になる予定である。

２人の世話役が現地で深く学生の研修にかかわろうとした場合，この程度の人数が適正規模であると思われる。これ以上多いと，世話役と学生との交流が事務的なものとなってしまう恐れがある。

最初の３回は廣田教授が個人的に世話をされたが，第４回からは筆者も世話役を務めている。またこの第４回からは九州大学の言語文化科目の単位を申請することができるようになった。さらに，2000年10月に九州大学大学院言語文化研究院は，ケンブリッジ大学ペンブロークカレッジと学術交流協定を締結したので，今後は従来にも増して受入れ体制が充実するのではないかと考えられる。

3．貴重な機会

ケンブリッジ大学で，正規の学生と同様に学寮に滞在し，図書館や食堂などの施設が利用でき，授業が受けられるのは貴重な機会と言える。世界に冠たるケンブリッジ大学の荘厳なまでにアカデミックな雰囲気は，滞在する学生に，勉学に打ち込む強烈な義務感を与え，自らの学力不足に対する焦燥感を抱かせずにはいない。ペンブロークカレッジと言え

ば，ケンブリッジ大学で３番目に古く，1347年に開設された由緒あるカレッジで，英国最年少の首相小ピットや詩人のトマス・グレイなどの人物を輩出している。ケンブリッジ大学の各カレッジは，学部とは別に，様々の分野の最高レベルの学者と学生が共に生活し，指導が行われる場である。このような制度は独特のもので，密度の濃い学びの場を作り出している。こうした環境の中で研修を受けることができるのは幸運と言っても過言ではないだろう。また，ペンブロークカレッジ側の受入体制は綿密を極め，学生の中には恐縮する者もいるほどである。英語研修を実施するならば，このような環境を用意することが効果的と思われる。旅行会社が企画するような安価な英語研修ツアーでは決して真似のできない環境と言えよう。

４．募　集

研修は毎年７月から８月にかけて実施されてきているが，参加希望者に対する説明会は前年の４～５月頃に実施される。宣伝方法としては公用掲示板や同僚に授業の中で知らせてもらうなどの方法をとっている。説明会に参加する学生のおおよそ半分は，そうした案内によって研修の存在を知るのだが，もう半分は先輩などからの口コミによって興味を持つようになるようである。

説明会では，カレッジの様子やカリキュラムの概要を紹介するが，参加を最終的に決心してもらうにあたって了解しておくべき事項についても説明する。提出書類や連絡方法などの他，強調するのは以下のような点である。

１）費用がかかるので無理をしないこと
２）家族の了承を得ること
３）健康に少しでも問題や不安のある場合は遠慮すること
４）研修までに授業や事前指導等でよく英語や英国について研鑽を積んでおくこと
５）英国外へ行かないこと
６）英国で自動車を運転しないこと
７）週末の自由旅行は自己責任において行うこと

説明会の参加者の多くは２年生であり，入学直後の時期であることから，１年生に研修の存在が十分浸透しないうちに説明会を迎えているきらいもある。熱心で優秀な学生を集めるためには，十分研修や説明会の存在を周知徹底するべきである。優秀な学生を派遣することによって，受入側の体制の更なる充実が期待できる。

従来４～５月頃に説明会を実施してきたのは，なるべく早く参加者を確保する必要があったからである。現在ではまとまった数の学生を集めることがさほど困難ではなくなってきたので，説明会は夏期休業の少し前でもよいかもしれない。しかしその場合は，参加予定者に前期の授業で奮闘して夏過ぎの選抜を迎える動機を与えることができなくなる。受講者の確定は11月で十分間に合うので，説明会はいずれの時期が適切か，常に見直すべきであろう。選抜されることを目標に，通常の英語の授業に熱心に取り組ませることができるのは重要な利点である。こうしたところにも研修の意義があると言えよう。

5．航空機の手配

ここのところ，７月18日前後の出国，８月11日前後の帰国というパターンに落ち着いてきている。３～４週間前後の研修期間を確保したいところであるが，これより出国が早ければ前期の全学教育の授業と重なってしまい，これより帰国が遅れれば，お盆の期間と重なって，これだけの人数分の航空券の入手が極めて困難である。研修期間全体を大幅に夏期休業期間後半にずらすことも考えられるが，これは受入れ側の都合により困難であることがわかっている。こうなると，航空券の手配は意外に難しい。要は信頼できる航空会社・旅行会社を選ぶことで，予約をなるべく早く，できれば１年前に申し込むことである。夏の国際線ダイヤが固まるのは早春であるが，仮予約は１年前から受けてくれるのが普通である。そうなると，参加学生の申し込みは前年夏までに受けるというスケジュールが望ましいことになる。交通手段の確保は研修にとって極めて重要な事項であり，世話役が手腕をふるわなければならない部分であるから，常日頃からの勉強が必要である。

但し，2002年度からは夏季休業前に前期試験が実施されるかもしれない。大学の学年歴に関する情報収集は肝要である。

6．受講生の確定と契約の締結

研修の受入れは契約によって保証される。ペンブロークカレッジは，前年11月末までに契約を締結することを求めているので，参加学生数はそれまでに確定しておく必要がある。従来は，参加希望者をほぼ全員受け入れることができたが，2001年の研修の申込者は70名に達し，選抜を実施せざるを得なくなった。様々な選抜の方法が考えられるが，勉学を目的とした研修なので，本人の熱意の確認の他，やはり英語を中心とした成績を参考にするのが妥当であろう。そうであればこそ，学生に対して熱心に授業に取り組む動機を与えることになる。

なお，選抜までの段階で，本人をよく面接調査しておくことが必要である。少しでも無理な部分が見える学生を選抜することは避けるべきである。

7．責任の所在

契約の締結当事者は従来廣田教授個人となっており，いわば世話役が主催者であって，契約内容に関する万一の事態には責任を負うことになる。また，全学から学生が参加して実施される研修であるのに，学生の身に万一の事態が生じた場合，教員個人が一身に責任を負う形になるのは避けたいところである。このため，まず学生にはトラブル防止のための様々な事前指導を実施している。特に学生に気をつけさせているのは，団体行動の規律遵守，英国外へ出ないこと，海外旅行保険への加入，国際学生証の用意，飲酒の節度，パスポートの管理，週末の自由行動の届け出制などである。更に家族の方々には，参加はあくまで学生の自己責任におけるものであり，万一の事態にあっては世話役が世話にはあたるが，全面的な責任を負うことはできかねる旨の同意書を提出していただく。もちろん，このような措置をとったからといって，万一の事態が生じたときに世話役がまったく免責

となるわけではないのは承知しているが，大学の正規行事として実施されているわけではない以上，参加側もそのことをよく理解すべきであろう。

いずれにせよ，トラブル防止策を何重にも施すことである。上記のような対策の他にも常に検討を怠らない態度が肝要と思われる。

8．最終参加確認

年が明けて，研修のある年の１～３月には費用を学生から預かって，受入先に送金する。学生には，払い込み後のキャンセルの場合は費用の払い戻しが受けられなくなる可能性があることを伝えて，参加の最終確認をとる。過去，出発直前になってキャンセルを申し出た者もいたので，この段階でよく確認する必要がある。

9．事前学習

出発前の４月から６月にかけて，数回事前指導を実施する。内容は，英国の事情の学習や，授業等での英語の学習状況の確認，手続き上の注意などである。特にこの段階で注意させる最重要事項はパスポートである。発給が遅いと航空券の発券に間に合わないし，英国入国時に一定の有効期限が残っていることを事前に確認してもらう必要がある。次に必要なのは，持参するお金の問題であろう。あまりたくさんの現金を持参せず，ぜひクレジットカードを持つように指導したい。なくしたときも再発行されるからである。このほか万一のときにいろいろと役にたつ。だが，実際はあまり使わないようにさせたい。カードには１月あたりの使用限度額がある。土産を大量に買い，使用限度額を使い果たし，現金もわずかとなり，帰路ロンドン空港で荷物の超過料金数万円を請求され，払えずに困っていた学生がいた。こうした海外滞在上の常識を身につけさせることも研修の意義に含まれるものと思う。

10．研修のスケジュール

ここでは2000年夏に実施された最新の研修を例にとる。現地に到着の翌日，学生はプレースメントテストを受けて，英語の授業のクラスがレベル別に５つ指定されるが，このうちＡクラスの学生を例にとってスケジュールの概要を示す。これ以外のクラスのスケジュールは，英語のクラスとビデオプロジェクトの時間帯がずれるだけで，あとは同じである。

7.18 Pembroke College 着（19:30）

7.19 Placement Test（9:30-11:00），Tour of Pembroke（11:30-12:30），Language Class（13:30-15:00），Tour of Cambridge（15:30-17:00），Gym Induction Session（17:00- 18:00），Drink Party（18:45-19:30），Formal Hall（19:30-21:30）
（Gym Induction Session は学生が利用できる運動室の登録と使用方法の説明）

7.20 Language Class（9:00-11:45），Computer Session（12:15-13:00），Cambridge Architecture Tour（13:45-15:15），Lecture Courses（15:30-17:00），Photograph（17:30）Wel-

come Party (20:30-23:00)
(Computer Session では学生にメールアドレスが発行され，コンピュータの使用方法が説明される。筆者は日本から持参したノートパソコンを学内 LAN に接続してもらい，各種の連絡に重宝した。)

7. 21 Pronunciation (mine, 9:00-10:15), Video Project (12:00-15:15), Lecture Courses (15:30-17:00)
7. 22 free
7. 23 free
7. 24 Language Class (9:00-11:45), Lecture Courses (15:30-17:00)
7. 25 Language Class (9:00-11:45), Lecture Courses (15:30-17:00)
7. 26 Field Trip (8:30-18:00), Drink Party (18:45-19:30), Formal Hall (19:30-21:30)
7. 27 Language Class (12:00-15:15), Lecture Courses (15:30-17:00)
7. 28 Language Class (9:00-11:45), Lecture Courses (15:30-17:00)
7. 29 free
7. 30 free
7. 31 Video Project (12:00-15:15), Tour of Granchester (15:45-18:15)
8. 1 Language Class (9:00-11:45), Lecture Courses (15:30-17:00)
8. 2 Language Class (12:00-15:15), Drink Party (18:45-19:30), Formal Hall (19:30-21:30)
8. 3 Language Class (12:00-15:15), Lecture Courses (15:30-17:00)
8. 4 Language Class (9:00-11:45)
8. 5 free
8. 6 free
8. 7 Language Class (9:00-11:45), Lecture Courses (15:30-17:00)
8. 8 Video Project (12:00-15:15)
8. 9 Lecture Courses Test (9:15-10:45), Language Class Test (11:15-12:45), Certificate Ceremony (18:30-19:30), Farewell Dinner (19:30-22:00), Farewell Party (22:00-24:00)
8. 10 Pembroke 出発 (12:30)

7月21日の Pronunciation Session は研修の正式科目ではないが，筆者が学生に発音指導を自発的に実施したものである。こうした試みは，学生との交流の上で効果的であるばかりか，学生にとっても，生きた教材がまわりにごろごろしている環境で学ぶので，日本で同種の指導を受ける場合に比べて熱心である。海外英語研修であっても，世話役が積極的に授業を持つことは意義のあることであるように思われる。

10.1 受入れ体制

夏期研修には，入れ替わり立ち替わりで，カリフォルニア大学，西南学院大学，日本大学の学生も訪れる。九大も含めた夏期研修全体を統括するのは国際プログラム主事（貴族の名誉職である Master (Sir Roger Tomkys) を除けばカレッジの実質的ナンバー1）のクライヴ・トレビルコック氏 (Mr. Clive Trebilcock) で，実務責任者として立ち回るのはアラン・ドーソン博士 (Alan Dawson) である。

学生は個室を与えられる。これはカレッジに住む正規の学生や教員が夏期休暇中に使用しない部屋を供出するもので，ベッドメーキングと掃除付きの部屋であり，学生が１ヶ月過ごすのに何の不足もない。

食事は平日の３食が料金に含まれている。カフェテリア方式で自由に料理を選択できるものの，量はいくら少しでいいと言ってもてんこ盛りされる。英国の食生活が端的に理解でき，学生にとっても良い機会になっているはずである。

洗濯はコインランドリーの使用が可能であるが，手洗いを薦めておいたせいか，バスで洗濯した学生も多かったようである。

パブが学内にある。夕方から午後11時までの開店で，学生が寝泊まりする場所であることに改めて気づかされるわけだが，パブ文化が大学の中にまで根付いているのは驚きである。

常駐ではないが，看護婦が一定時間帯に待機している。健康相談や簡単な治療が期待できる。重病の場合はケンブリッジ大学付属のアーデンブルック病院に搬送される。

夏期研修専用の事務室が設けられており，学生，引率者共々不明の点があればここを訪ねることになる。研修後半には，これとは別に，日本人学生用の窓口も開設された。

この他夜間を中心に何でも相談にのってくれるのがポーターで，カレッジの入口のポーターズロッジと呼ばれる部署に配置されている。

10.2　スチューデントチューターとイベント

九州大学の学生に対して４人のスチューデントチューターがついた。３人までは現役のペンブロークカレッジの学生である。数十人の希望者から選ばれるだけあって，大変親切で面倒見のよい４人であった。ほとんど毎晩イベントを組んでくれるし，週末の旅行の相談，非常の際の連絡など，実にいろいろお世話になった。

イベントは，歓迎パーティ，野外劇鑑賞，映画鑑賞，バーベキュー，お茶会，各国料理，パブ，ディスコ，カラオケ，サッカー，ビリヤード，パンティング（ケム川の舟下り），さよならパーティに至るまで，実に盛りだくさんであった。

平日の毎日，アラン・ドーソン博士が各大学担当のスチューデントチューターを一堂に集め，綿密な打ち合わせを行う。こうした密度が濃く，人員を惜しまない支援体制が，ペンブロークカレッジでの研修をより有意義なものにしていると言えよう。

10.3　英語の授業

英語の授業はプレースメントテストで能力別に編成された５つのクラスごとに実施される。52人の学生であるから，１クラスあたり10～11人ということになるが，英会話を中心としたタスクをこなしていくにはちょうどよいサイズだと言えよう。担当講師はケンブリッジにゆかりのある学位を持った経験豊かなネイティブスピーカーたちである。担当教師ごとに授業を見学させていただいたが，発音は明晰で明朗な性格，学生と即座にうち解けて技量も十分であった。

授業の内容としては，様々な会話・ディスカッションのタスク，発音指導，英語表現の学習など多彩である。１日につき，原則として60分セッションと90分セッションがあり，決して楽ではない。授業は教室内だけで実施されるのではなく，学外に出て，通りすがり

の人にインタビューするタスクなど，日本では絶対にできないものが含まれている。研修の授業では一般に，そのような現地でしかできないことを大いに取り入れてもらえるように，授業内容に立ち入って研修内容の契約をすべきである。

但し，学生の中には，宿題をもっと出して欲しい，レベルを更に上げてもらって構わないという意見も聞かれ，来年度以降の課題として残った。このような意見は現地で研修中に聞こえてきたので，現地スタッフに学生から書面で意見を聞く機会を作ってくれるように依頼した。このような双方向コミュニケーションが大切である。

10.4 講義科目

講義科目は「ゴシック小説と映画」「日英の若者文化の比較」「英国の建築美術」の３つが用意されている。学生はこのうち１つを選択して履修する。１クラス17～18名で，講義科目としては日本の大学の常識からしてかなり贅沢である。いずれも博士またはそれに準じた研究者によるもので，深い専門的教養をもとに，わかりやすく講義を展開してくれるが，学生にとっては初めての内容で，かなりついていくのが大変なようであり，試験勉強はかなりハードだったようだ。これらの科目についても授業見学をさせていただいたが，これらの講義科目があるお陰で，海外の大学における勉学のハードさを実感できる。このことは学生にとってかなり貴重な体験となっているようである。英語研修を実りあるものにする上で，このような英語の運用能力養成以外のメニューが用意されていることは，大いに意味のあるものであるし，ケンブリッジ大学で学ぶことの意義をよく体現しているように思う。

10.5 ビデオプロジェクト

今回より新しく加わった授業で，英語授業のクラスと同様に５クラスに分かれている。それぞれのクラスでは更に２つのグループに分かれ（全体で10グループになる），５名程度の集団で１つのビデオ作品を作成する。これも一部見学させていただいたし，ビデオへの出演も２本ばかり要請された。

このプロジェクトは実に学生にとってよい体験である。撮影，編集作業はすべて英語を用い，自分たちだけで近隣の商店など学外の一般人に対して取材の段取りをつけて撮影を行い，それぞれのグループ独自のテーマに沿って作品を仕上げる。能動的集団作業により，参加学生同士の絆が強まり，作品を創造する悦びを経験する。同時に，普段何気なく見ているテレビや映画などの映像が実に多くの手がかかったものであることが実感できる。完成作品上映会ではお互いの作品をたたえ合い，満足そうな笑みが印象的だった。

担当者は過去に英語の授業を担当していた方で，たまたまパソコンによるビデオ編集の達人であったため，このプロジェクトを提案してカレッジに受け入れられたという。このように，現地担当教員側からの自発的創意工夫が研修をよりよいものにしているということは何とも幸運なことであり，そのような気持ちになってもらえるような熱意ある学生を研修に送り込むことがいかに大切かという思いにかられる。

10.6 フォーマルホール

毎週１回，計４回夕食に正餐が実施される。初回は歓迎ディナー，最終回はフェアウェ

ルディナーである。これは，長机と長椅子という独自のスタイルの食堂（ホール）で行われ，カレッジの専属スタッフが給仕にあたる。学生は日本から持参した礼装で臨む。正餐自体も学生にとっては物珍しいであろうが，英国の文化というものに触れるよい機会にもなっている。英国では運ばれたプレートから自分で皿に取り分けるのが最高の格式のディナーのマナーであること，カレッジブランドの酒が出て回し方にルールがあること，コースの一部として，教員には葉巻が出ること（食堂が禁煙でないわけである）など，いくらでも気がつく点がある。

このフォーマルホールにはトレビルコック氏を始め，現地スタッフの多くが参加するのだが，九州大学の学生（西南学院の学生も一緒のことが多かった）だけでも３週間たらずの間に４回あるわけで，日本大学，カリフォルニア大学も含めれば１ヶ月程度の間に恐らく10回以上の出席となり，夜９時を過ぎるまでつきあうのは本当に骨が折れることだろうと思う。しかしそれを敢えて厭わないもてなしの格式へのこだわりに，学生も感じるところがあるだろう。

ついでながら，フォーマルホールの際に，ハイテーブルが実施されることがある。ハイテーブルとは，カレッジのフェロー（教員のうち貢献を認められた者がカレッジから与えられる称号）及びその招待客の正餐で，ホールの中の雛壇の上で実施される。その参加者が雛壇に登壇する際は，銅鑼の音と共に全員起立で迎え，食事を終えて降壇する際も起立で見送る。筆者も何度か招待され，学生やトレビルコック氏らの起立で迎えられるのは何とも妙な気分であった。ハイテーブルでは，聖水による清めなど，宗教的儀礼が色濃く残った手順に従っており，それを目撃する学生としては大いに異文化と伝統の重みを感じたことであろう。ハイテーブルが終わるとその参加者は別室（パーラー）に移動し，果物や酒を前に高尚な語らいの時間を持つ。そのレベルたるや，学術の世界に少しは慣れているはずの筆者でさえ，相当なプレッシャーを感じるものである。学生も研修内容に関してこのような気持ちを味わっているのではないかと想像するのであるが，それこそが研修の一番の目的と言ってもいいかもしれない。

10.7　ケンブリッジ市

ケンブリッジの街自体が広い意味で学びの場であると言える。学生は生活必需品や書籍や土産を求める場合，街に出て行って英語を使わなければならないし，商店街や市のあり方，商品構成，開店時間など，日本と比較して異なる部分を多く発見することになる。大学が街の中心にあること，自動車の流入を制限して人が歩くことを優先させていること，公園が素晴らしいことなど，実に参考になることが多い。

10.8　国内旅行

研修期間中の平日に１日，バスツアーが組まれている。公共交通機関では回りにくいコースが選ばれていて，時には英国の人でも知らないという土地にでかけたりする。ケンブリッジに閉じこもらないで，広く英国を見聞する意味で，このツアーは大きな意味を持つように思う。このように，研修の参加者全員が研修の実施される場所以外の地域を経験するように配慮することが必要と思う。

10.9 週末の旅行

週末は自由行動としている。ほとんどの学生がロンドン，カンタベリー，ストーンヘンジ，ストラットフォード・アポン・エイヴォン，オックスフォード，コッツウォルズ，リバプール，マンチェスター，湖水地方，エジンバラ，グラスゴー，カーディフ，その他様々の場所に出掛けて行く。事故なき研修という観点からは，週末もケンブリッジに閉じこめておくのが最良ということになるが，研修参加が学生の自己責任である点から，事前に世話役にコースや宿泊施設の連絡先などを提出し，必ず複数で行動し，外国へは行かないことを条件に，外泊を伴う旅行も認めた。この旅行で，宿が見つからない，列車が遅れてあわてる，などのトラブルに巻き込まれてよい経験をする学生が続出した。多くは成人である学生のこと，英語もある程度使えるのだから，あまり心配することはないと考える。これを抑止するような研修なら研修の名に値しないとすら思う。

世話役はカレッジから携帯電話の貸与を受け，学生に電話番号を伝え，万一のときは連絡が取れるようにしておいた。こうすれば世話役も週末に外出ができる。プリペイドカードを購入して，ピンナンバーを電話機に登録すれば，支払い口座も不要で，気軽に海外でも携帯電話が使用できる。筆者が貸与を受けた機種は，日本からも直接かけることができたため，これ以上の連絡体制はなかった。

11. 成　　績

Language Classes と Lecture Courses については後日成績が世話役に送付されてくる。100点法によっており，60点未満の不可も含めて，幅広い成績帯をなしている。かなりシビアに評価されている。本人に手渡す成績はＡＢＣ法によっており，100点法によるものと比べて幾分評価が甘い部分も見られた。世話役としては，100点法による成績も参加者に伝えた。このことが後輩たちに伝わり，研修での奮起が必要なことを理解することを期待している。

12. 単位の申請

研修から帰国した後，世話役に研修の成果を綴ったレポートを提出することとなっている。その際，研修をもって九州大学の単位の申請を希望する学生は，その旨をレポートに明記してもらう。そのような学生がいた場合は，研修の事前指導・研修の内容・研修後の成績判定の予定などを資料として提出した上で，教務関係の委員会にこの研修を単位振替の対象行事として認定してもらう。それが認められたあと，学生に対して研修の成果についての口頭試問を適宜実施し，現地での様子，現地で得た成績，レポートの内容，口頭試問の結果などを踏まえて，世話役が成績を算出して，単位の申請を行う。審査の結果問題がなければ，３月31日付けで最大２単位が言語文化科目英語として認定される。このままではふつう学生にとって余分に単位を取得するだけのことになる。なぜなら，参加する学生は最年少でも２年生であり，単位が認定される年度末には，必修の言語文化科目としての英語の単位は通常すべて取得が完了しているからである。従って，学生によってはこれを３，４年次に必修の広域選択科目，高年次教養科目として読み替える手続きをする者も

いる。

海外英語研修の単位化は望ましい。学生により一層の動機を与え，単位認定方法の多様化という観点からも意義深い。

13. 学生の反応：英語力に関して

届けられた学生のレポートの中から何カ所か引用する。おそらく何の解説やコメントも必要ないであろう。

私が研修への参加を決意してから出発の日まで，約半年の期間があったのだが，私はその間「研修」のおかげで，非常に前向きな姿勢で英語に取り組むことができた。というのも，「研修までに少しでも英語力を伸ばしたい」という思いから，私は以前から通っていた英会話学校にさらに頻繁に通いつめたり，通学時間を利用してほぼ毎日一時間半リスニングの練習をしたりしたのである。このように，「ケンブリッジ研修」という明確な目標があったからこそ，私は出発までのあいだ集中的に英語を勉強できたし，結果それまでダラダラと過ごしていた生活にメリハリがつき，大変充実した「準備期間」を送ることができた。

この研修を終えて私の中で多くの著しい変化が起こった。第一に，自分にとって英語が前ほど遠い存在ではなくなった。今までは英語といえば受験のため，授業のためという感覚だった。しかしこの研修で多くの人々と英語で会話していくうちに，英語という国際語を使う自分というものを強く認識したのである。自分も国際社会の一員であることを感じ，改めて自分にとって，英語がいかに必要不可欠のものであるかということを実感した。

授業が進むにつれて，私は呆然となった。先生のおっしゃることが聞き取れないのだ。わからない単語がいくつかある，どころではない。「全く」と言えるほどわからないのである。確かに先生は早口で，しかも切れ目なく喋られたし，発音もかなりクセがあった。しかしそれを考慮してもなお，明らかに私はついて行けなかった。聞き取れないのでノートに書くことも何にもなかった。授業後，あまりのショックに部屋でぼーっとしてしまった。そして，明日から一体どうすればいいんだろう……？と，悲観的になっていた。それからというもの，この授業が憂鬱でしかたなく，授業のない日はほっとした。しかし，このままでは進歩がないと気づき，わからなくてもとにかく全力で授業を受けようと決めた。（中略）先生も，私のように理解できていない生徒がいることに気づかれたのか，2回目以降は随分譲歩してくださり，少しずつ話が聞き取れるようになった。（中略）それからは少しでもついていけるように予習もばっちりして。まるで挑戦者のような気分で臨んだ。すると，だんだん授業が苦痛でなくなり，むしろ一番楽しみなものになった。（中略）［この授業の］ことは絶対に死ぬまで忘れないだろう。本当に，「英語の授業」を受けたという感じだった。ケンブリッジに来て，この授業を受けることができてよかった，と本当に思う。

よく，細かい文法を考える前にとりあえず話しなさい，というようなことを聞くが，（中略）それだけでは全く無駄だと思った。実際［ある先生は］いつも，単語だけを並べて質問に答えようとする私たちに，“Give me a sentence!”と言っていたし，（中略）ちょっとした文章を書くとき，何を言いたいのか理解してもらえない時があった。やはり，正確に自分の意思を伝えるためには，細かい文法もかなり重要なんだなあと感じた。

欧米では，とにかく人と話すことが礼儀であるようだ。

14. 学生の反応　人生の糧として：結論に代えて

提出されたレポートを見ると，英語の実力がそれほどなく，観光旅行的に感激を語る者もいるのだが，それより深く，今までの人生で最も重要な機会であったという感想も多く見られた。何人かの言を引用してみる。

私は研修前や研修中，ずっと次のような不安を抱いていた。それは「この研修が終わったら，私は次に何を楽しみに，何を目標に生きていけばいいんだ……」という不安であった。これはなぜかというと，自分の将来や方向性についてつかめていなかった当時の私にとって，研修の終了は，今まで目標としてきたものを失うことを意味していたからである。しかし，いざ研修を終えてみると，そのような不安は杞憂であったことがわかった。ケンブリッジでの三週間半の研修には，私が次なるステージへと進むのを後押しするのに十分すぎるほどのインパクトがあった。研修を終えて帰って来るころには，私の中にしっかりとした「次なる目標」が生まれていたのである。

このケンブリッジ研修に参加しているメンバーに強く影響され，かつ自分の勉強不足を痛感した。英語はもちろんのこと，他の分野に関しても，幅広い教養を身につけたいと思った。本来大学生とはそうあるべきで，日本の大学生はあまりにも勉強量が少ないのだ。

感動したこと，といえば帰国前日の farewell party も忘れることは出来ない。ほんの数日間しか練習はできなかったものの，皆で歌った The Sukiyaki Song と「仰げば尊し」は本当に素晴らしいものであった。そもそも歌を歌うということ自体，パーティの数日前にひょんなことから廣田教授の口から飛び出した案であったのだが，皆が知恵を出し合い，あっという間に曲が決まり，伴奏者が決まり，パートが決まり，といった調子で，計画は大変スムーズに進んだ。この過程のなかで，研修参加者全員の，集団としての絆は間違いなくより強いものになったと思う。私はこの過程を通して，「協力すれば何でも出来るんだ」ということを強く実感した。

私はイギリスに来て，毎日毎日心の底から幸せだった。（中略）この旅行を思い出すたびに何だか満ち足りた気持ちになるのが自分でもよくわかる。このような生涯忘れら

れない素晴らしい経験をして，私の中では徐々に何かが変わっているような気がする。これから過ごしていく１ヶ月１ヶ月を，イギリスでの１ヶ月に匹敵するくらいに充実した価値あるものにしていきたいと考えるようになった。それを実行するには強い意志が必要であるが，それが自分に備わってきているように思える。

このような感想を読んでいると，自分の向学心を燃えさからせること，そうして納得できる，積極的な充実した人生を送っていけるようになること，それこそがこの研修の真の狙いであるように思えてくる。学生が定期試験のおまけに書かされる授業に対する感想などは本心を書かず，心ならずも教員をほめたりするものだが，研修に参加した学生のレポートを読んでいて，彼らと生活を共にした者として，筆者はこれらが全く偽りのない気持ちであることを確信している。それらの多くが，ケンブリッジという素晴らしい環境に負っていることにもまた確信がある。荘厳なまでの重厚さが我々にのしかかり，怠惰な自分に地団駄を踏む思いがわき起こってくる。

たかが語学研修，されど語学研修，最高の舞台を用意する志，それこそが英語研修の成功の秘訣ではないだろうか。その見返りは世話役にもある。farewell party での合唱に向けてまぶしいばかりに光輝き動き出した学生に対し，ピアノの確保や会場の設営に奔走した我々も，およそ教育というものの中で最高に嬉しい仕事をさせていただいて，学生たちに対して感謝にたえないのである。

The Benefit Gained from an Overseas English Summer School

— Kyushu University Students in Cambridge University —

Every summer, Prof. Hirota and the author take approximately 50 Kyushu University students to Pembroke College, Cambridge University for a one-month Summer School. This program includes language classes, lecture courses, a video-project (the students make a short film), a field trip and formal dinners. Four student tutors take care of our students: they organize daily event like a dinner party, boating, a disco and soccer matches and also book hotels, theatres and trains for weekend trips. This hospitality, coupled with the profound academic and historical atmosphere of the college, urges the students into exceptionally high concentration on their work. Many of them report that great improvement can be observed in their English skills and that this summer school would definitely be the most enriching experience of their whole lives.

The present paper offers a brief description and evaluation of the program, recruiting process, advance preparations, the beneficial aspects of the program and so forth.